

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

幸福路のチー (幸福路上 / On Happiness Road)

2017年 / 台湾映画

配給：クレストインターナショナル / 111分

2020 (令和2) 年1月30日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：宋欣穎(ソン・シンイン)

声の出演：ガイ・ルンメイ / ウェイ・ダーション / リャオ・ホイチェン / チェン・ボージョン / ウー・イーハン / ジウス・ジゴウ

👁️👁️ みどころ

片渕須直監督の『この世界の片隅に』(16年)は「先の大戦」の中で世界の片隅(呉)に生きる少女すずを描いたが、宋欣穎(ソン・シンイン)監督は自身の半自叙伝たる本作で、激動の台湾現代史の中で生きた少女チーを描くことに。こりゃ、タリバン政権下のアフガンのカブールで、髪を切り少年として生きた少女を描いた『ブレットウィナー』(17年)と共に必見！

日本は昭和から平成、令和と移る戦後の75年間も平和を維持できたが、台湾は激動の歴史。とりわけ、アミ族の血を1/4引いているチーには、白色テロはともかく、小学校教育から大きな影響が！そんな中、なぜ彼女はアメリカへ？そして台湾に戻る中でいかなる変化を？

幸福路の運河が整備され、周辺の風景は一変！同級生たちの変化も当然だが、チーの変化は如何に？今年の1月に71歳を迎えた私は、故郷の松山や自分の生きざまと対比しながら本作を鑑賞したが、さてチーと同世代の日本の若者はチーの決断をどう受け止め、自分とどう対比するのだろうか？

■□■2018年に受賞！話題が拡散！総統選挙直後に公開！■□■

チラシによると、2017年に製作された台湾のアニメ映画である本作は、「その年の優れた海外アニメを選出する東京アニメアワードフェスティバル2018で一番のダークホースとして話題を集め、見事グランプリを受賞した」そうだ。また、「その後も名だたる国際映画祭で受賞を重ね、2019年アカデミー賞長編アニメーションの25作品にエントリーされるなど、世界中にその共感の輪を広げてきた」そうだ。

しかし2017年の日本では、片渕須直監督のアニメ映画『この世界の片隅に』(16年)が大ヒットしたし(『シネマ39』41頁)、2019年から2020年にかけては、『この世界の(さらにはいくつもの)片隅に』(19年)と題された、その「完全版」が再度大ヒットしていたから、私は本作のことはよく知らなかった。そんな中、2019年5月以降急速

に高まった香港の大規模デモを受けて、2020年1月の台湾の総統選挙では不利だと見られていた、蔡英文の人氣が急上昇。2020年1月の投票票の結果、817万票（57%）対552万票（39%）で、民進党の蔡英文が国民党の韓国瑜に圧勝した。これは、「香港の悲惨な実情」を目撃した台湾の若者たちが、「明日は我が身」と感じ取り、それが蔡英文への投票活動に駆り立てたためだ。本作は決して特定の政治的立場に立つ映画ではないし、まして民進党の蔡英文の支持を訴える映画ではないが、宋欣穎(ソン・シンイン)監督自身の半生を振り返って描いた本作も、その一助となったのでは？

そんな風に、2018年に受賞し、話題が拡散し、台湾の総統選挙直後に本作が日本で公開される中、NHKのBS1「国際報道2020」（2020年1月放送）は「池畑キャスターの視点『チー』が生きた台湾現代史」を放映した。2020年1月20日に公開される本作を私はかなり前から観る予定にしていたが、このテレビ放送を見て、こりゃ必見！と意気込みを新たにすることに。

■□■チーはソン・シンイン監督の分身！その半自叙伝は？■□■

本作を監督した宋欣穎(ソン・シンイン)は1974年生まれだが、本作の主人公チー(グイ・ルンメイ)は1975年4月5日生まれ。ソン監督は台湾大学を卒業した後、新聞社「自由時報」でジャーナリストとして働き、2004年から2年間、京都大学大学院で映画理論を学んだ後に渡米している。それと同じように、チーもアメリカに渡り、台湾に戻ってくるから、ソンとチーの40歳までの半生の生き方はほぼ同じだ。しかし、チーがアメリカに渡ったのはソン監督のようなカッコいい留学ではないし、アメリカ人トニーとの結婚生活もうまくいっていない。さらに、両親から「医者になれ」と言われ、自分もそれを目指して頑張ったものの、1993年に18歳で大学に入学し、政治運動に目覚めたチーは、医学部志望から文学部志望に変更。そのあげく、卒業後は仕方なく(?)新聞社に入社する体たらくだから、2007年からコロンビア・カレッジ・シカゴに在籍し、映画修士号を取得し、さらに約12分の短編『幸福路上 On Happiness Road』(13年)で、第15回台北電影節の台北電影獎で最優秀アニメーション賞を受賞した、ソン監督の華々しい半生とは大きく違っている。

さらに、「幸福路」は台北に現実にある路だが、ソンは幸福路の出身ではないし、夫もアメリカ人ではなく台湾人。しかし、チーの生き方に大きな影響を与える祖母(ジワス・ジゴウ)がアミ(阿美)族であるのは、ソンの母方の祖母も同じだ。また、本作導入部で描かれる、小学校時代のチーが台湾語を話すことが禁止され、北京語を話すことを強制される風景とそこでの体験はソン監督も同じだ。パンフレットにある「インタビュー」で、ソン監督は、「まず主人公チーの何パーセントが私自身のことかと問われれば、答えは50%です。」と答えているから、本作こうまく散りばめられた「その虚実」を含めて、チーはソン監督の分身であることをしっかり確認したい。そして、「映画の中の『チーにはアミ族の血が4分の1流れている』という台詞には、祖母へのお詫びの気持ちを込めています」と

いうソン監督の言葉を、単一民族であることに何の疑問も持っていない私たち日本人はしっかり受け止め、その言葉の深さと重みをしっかり考えたい。

■□■故郷、幸福路、運河、高層ビル、そして同級生■□■

チーの故郷は台北市郊外に実在する幸福路だが、私の故郷は愛媛県松山市。湊町2丁目にあった自宅から八坂小学校に通っていた小学生時代は、その通学路に中の川があり、ここでは魚をすくったり川飛びをしたりして遊んだもの。また、からかっていた女の子を追いかけて走ったのも、中の川沿いの道だった。しかし、何十年か後にそこを通った時、すでに中の川は埋め立てられていたし、周辺一帯は大きくサマ変わりしていたが、それは当然。それと同じように、本作導入部では、幼い頃両親と共に幸福路に引っ越してきたチーが、小さな川にかかる橋の上でいろいろと空想をたくましくしている風景が描かれる。幸福路にあったこの川や周辺の風景がチーの目に焼き付いていたのは当然だが、祖母の死を聞いて久しぶりに故郷に帰ってみると、その川は運河として整備され、遠くには高層ビルが立ち並んでいた。その上、チーはそこで小学生時代に隣の席に座っていた金持ちのボンボンの男の子に偶然出会ったが、彼はチーが誰だか思い出せなかったほどだから、風景も人も変わってしまったわけだ。彼は今、市議員の候補者として輝きながら活動していたが、それに対して自分は？

私は大学入学と同時に故郷を離れて大阪に住み始め、その後は1年半の東京での司法修習の期間だけ東京に住んだが、あとはすべて大阪を本拠地にしてきた。中高時代の同級生のほぼ半数は、今故郷の松山に戻っているが、私は両親が住んでいた松山の土地、建物を両親の死後売却処分し、今や故郷には何の拠点もなくなった。しかし、それでもなお、高校生まで過ごした故郷・松山の風景や人々の姿は、いっぱい私の目の中に焼き付いている。しかして、祖母の葬儀を終えたチーは、これからどうするの？アメリカにいる夫とはきっぱり離婚し、自分は台北で過ごすの？仕事は？

チーが台北に戻ってきたのは2011年、36歳の時。折しも、民進党の予備選挙で蔡英文が次期総統選候補に選出された時期だ。小学校の同級生だった男の子が、再会した私を見ても、私だとわからなかったほど、私は変わってしまったようだが、さて、これから私はどうすれば・・・？そんな未来を考えることは、すなわち36歳まで生きてきた自分の過去を考えること。そこで、チーは幸福路で過ごした日々の記憶を辿り始めることに・・・。

■□■チーの成長に伴う台湾の変化（現代史）は？■□■

昭和後半の40年間と平成の30年間を生き、今は令和の時代にも足を踏み入れた私だが、私が生きてきたこの70年間、日本は戦争をせず、平和国家を維持してきた。それは、考えてみれば、すごいこと、そして稀有なことだ。それに比べると、1975年生まれのチーが、29歳から36歳までのアメリカでの生活を含めて、2011年に戻ってくるまでの台湾の歴史は、激動の歴史だ。本作のパンフレットには、「映画で描かれた主な歴史的出来事」があるので、それをしっかり勉強したい。また、産経新聞で連載中の「李登輝秘

録」でも同様の歴史がわかるので、それも併せて勉強したい。

本作導入部では、小学校に入ったばかりのチーたちが、教師から台湾語を話すことを禁じられ、北京語を強要される姿や、アミ族の血を引いているチーの祖母がピンロウを囁んでいると知った同級生たちから、台湾原住民のアミ族を「野蛮人！」とはやし立てられる姿が登場する。私の小学生時代は貧しいながらも日本人のすべてが前向きの時代で、「これから豊かになる！」という夢と希望に溢れていた。そのため、チーのような嫌な体験をしたことはない。愛光学園に入学した後は、大学受験のための勉強の強要(?)にかなり嫌な思いをしたが、それはあの時代特有の競争社会を生き抜くためには仕方なかったものだと、自分でも納得している。そんなこんな私の体験に比べると、本作に描かれるチーの体験は大変なものばかりだ。

私が興味深かったのは、大学に入学したチーが学生運動に参加する中で、それまでの医者を目指すガリ勉タイプから志望を文学、哲学方面に変えたり、政治に目覚めた後は、民進党の陳水扁の応援をやり始めたこと。この姿は大阪大学に入学した当初の私と同じだが、それはそれとして、いい体験になるもの。少なくとも私はそうだったが、さてチーは？本作の主人公チーはソン監督の分身だが、気が付くと私自身も、自分の体験に重ね合わせながらチーの36歳までの生き方を一緒に考えていることに、少し苦笑・・・。

■□■ベティやシェンエンとの再会は？チーの決断は？■□■

故郷へ戻ったチーが運河にかかった橋の上で偶然出会ったのは、お金持ちのボンボンの同級生だったが、チーが小学生時代に最も親しくしていたのは、金髪の女の子ベティと貧乏人の息子で親から小学校を辞めさせられた男の子シェンエンの2人。振り返ってみれば、小学生の時にこの3人で一緒に遊んだのが、3人にとって最も幸せな時期だったが、今更その時が戻ってこないのは当然。また、アメリカに留学していた従兄のウェン（ウェイ・ダーション）の薦めでチーがアメリカに渡ったのが良かったのかどうか微妙なところだが、それも今更どうこう言っても仕方のないもの。要は、台湾に戻ってきた2011年の今、36歳になっているチーがこれからをどう生きるのか？具体的にはトニーと離婚するのかどうか？どんな仕事に就くのか？等の選択と決断が大切。そう思っていると、何と今この人生の分岐点において、チーは自分が妊娠していることに気付いたから、更に今後の選択が難しくなることに。

他方、台湾に戻ったチーはベティやシェンエンと再会するが、小学校をやめさせられたシェンエンも今はバイクの修理店を営み、子供も育てていたから立派なもの。また、金髪の少女ベティも、今は2人の子供の母親としてたくましく生きていたから、チーはビックリ。そんな2人の同級生の現在の生きざまが、チーの今後の生きざまに大きな影響を与えたことは明らかだ。チーの分身たるソン監督は、アメリカから台湾に戻った後は映画監督として本作をはじめとする映画製作に励んでいるが、本作の結末ではチーの選択をしっかりと確認し、その未来を応援したい。

2020（令和2）年2月5日記